

基本のホン!

その③ キュウリ



今回紹介するキュウリは、ヒマラヤ発祥の野菜です。好む気候は暑すぎず寒すぎず。水をたっぷり与えてやれば、花が咲いてわずか1週間で収穫できます。みずみずしい果実を、毎日たっぷり味わいましょう。

恵泉女学園大学 園芸文化研究所助教授
藤田 智

キュウリの特徴

キュウリは、インド北西部にあるヒマラヤ山麓原産の、ウリ科のつる性一年草です。雌雄異花同株で、雄花と雌花があり、収穫対象は雌花につく若い果実です。生育適温は18〜28



キュウリの雄花。



キュウリの雌花。

と冷涼な気候を好みますが、霜には弱く、10〜12 以下では生育しません。また、浅根性のため乾燥に弱いので、有機物を多く用いた土づくりを心掛けます。キュウリは果菜類の中でも、発芽から収穫までおよそ60日と最も短く、さらに開花から約7日で収穫できるため、適期を逃さないよう気をつけます。キュウリなどのウリ科野菜を連作すると、「つる割病」という土壌伝染性の病害が発生し、致命的な打撃を受けます。輪作ないしは接ぎ木苗を用いて、被害を抑えましょう。自根苗では、果実表面に白い粉（ブルーム）が現れますが、接ぎ木苗だと表面にツヤのあるブルームレスキュウリが収穫できます。

みずみずしい味わいが魅力的な夏野菜、キュウリ。

主な品種

家庭菜園向けの作りやすい品種としては、Vロード、夏ばやし、つばさ、北進などがおすすめです。また、四葉系のシャキット、鈴成四葉も、歯切れのよい肉質でぜひ作ってみたい品種です。地方品種では、半白節成、加賀太キュウリ、さらにはピクルス用キュウリ（酒田、最上ほか）などもあり、用途に応じたキュウリ栽培もおもしろいものです。

‘Vロード’



ウイルス病に耐性を持ち、作りやすいキュウリ‘Vロード’。

おすすめ
キュウリ
あれこれ

‘加賀太キュウリ’



果肉が厚く肉質のつまった石川県産の地方品種‘加賀太キュウリ’。

‘半白節成’



果皮がやわらかく風味のよい半白キュウリ‘半白節成’。

‘シャキット’



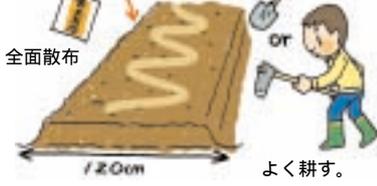
四葉系の歯切れや肉質のよさに、みずみずしさを加えた夏秋栽培用短形四葉キュウリ‘シャキット’。

地方品種は取り扱いがないものもございますので、ご了承ください。

第1図 土づくり

植え付け2～3週間前
石灰散布、耕起

苦土石灰
1㎡当たり
150g



植え付け1週間前
元肥散布、畝作り

元肥を全面散布し、土とよくなじませ
た後、畝を作り黒マルチを張っておく。

<2条植えの場合>

畝幅120cm、
畝高15～20cm

元肥 1㎡当たり	
堆肥	4～6kg
化成肥料	100～150g
油かす	100g
熔リン	60g

<1条植えの場合>

畝幅60～100cm、
畝高15～20cm

をそれぞれ全面散布



1 土づくり 栽培方法

キュウリは浅根性で、根が水平に分布しています。そのため、有機物を多量に施して深く耕し、通気性を改善して、根に酸素を十分供給することが大切です(第1図)。

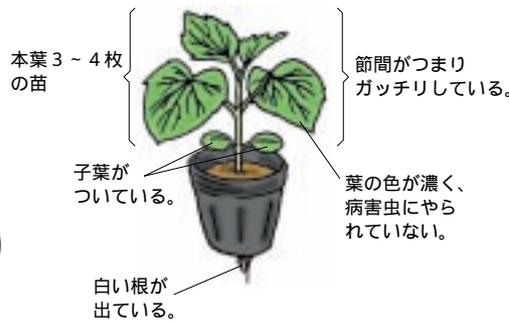
第2図 よい苗



キュウリの接ぎ木苗。つる割病に抵抗性があり、生育も旺盛になる。



接ぎ木部

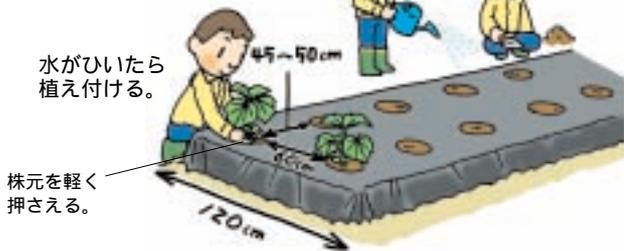


2 タネまきと植え付け
購入した苗を使う場合は、4月下旬～5月上旬の霜の心配がなくなるころに植え付けます。苗には、自根苗と接ぎ木苗があります。接ぎ木苗は値段が高い分、つる割病抵抗性を持ち、生育が旺盛で収量も増えます(第2図)。植え付けについては、第3図を参照してください。

第3図 植え付け

<2条植え>

畝幅120cm、株間45～50cm、
条間60cmとする。



<1条植えの場合>

畝幅60cm、株間45～50cm
とする。



タネまきと苗作り

自分で苗を作る場合は、5月上旬(保温できれば、4月上旬でもOK!)に10～12cmポリポットへタネを3粒まき、生育のよいものを1本残してほかは間引きます(右図)。もちろん、直まきもできます。40～45cm間隔で3～4粒ずつタネまきし、本葉3～4枚になれば1本立ちにします。

10～12cmポリポットへ3粒まきにする。



発芽したら、生育のよい芽を2本残す。



2本立ちに

本葉1枚の時、間引きして1本立ちに。



1本立ちに

定植適期まで育てる。



本葉3～4枚

3 管理

第4図 支柱立て

家庭菜園では、あらかじめ立てておく方が作業しやすい。

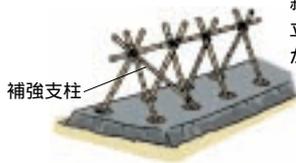


ビニールテープでしっかり支柱を固定する。

<合掌式(2条植え)>



<直立式(1条植え)>



斜めに補強用の支柱を立てると、かなり強度が上がる。



支柱立て・誘引
支柱は、1条植えの場合は直立式、2条植えの場合は合掌式とします。つるが伸びてきたら、ひもなどで支柱に誘引しながら栽培します。植え付け前に支柱を立てておいてもかまいません(第4図)。週に1回が誘引の目安です(第5図)。

第6図 整枝

親づるは、支柱より高く伸びたら摘芯。

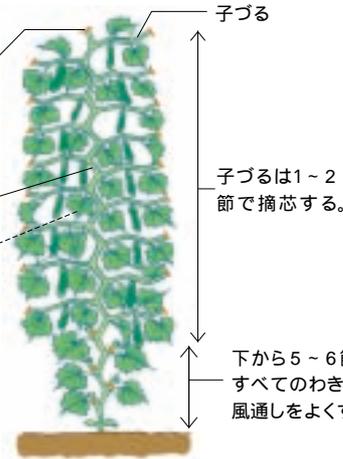
親づる

1~2節で摘芯。

親づる

1~2節で摘芯。

子づる



子づる

子づるは1~2節で摘芯する。

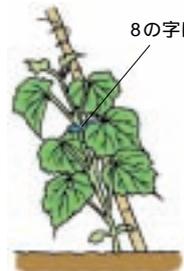
下から5~6節までは、すべてのわき芽を取り、風通しをよくする。

整枝
親づるの5~6節までの側枝(子づる)はすべて摘み取り、通気性をよくします。その上から出る側枝は1~2節で摘芯し、親づるの1本仕立てとします。親づるが支柱の高さに達したら摘芯して、側枝は放任します(第6図)。

第5図 誘引

週に1回行う。

8の字に誘引。



結ぶ時は、茎にやさしく支柱に厳しく!!

4 病害虫

べと病にはダコニール10000倍液、うどんこ病にはモレスタン4000倍液を散布します。また、アブラムシにはDDVP1000倍液、ウリハムシにはマラソン乳剤1000倍液を散布します。天然成分の農薬としては、アブラムシにはオレート液剤、うどんこ病にはカリグリーンなどがあります。

敷きわら
梅雨の時期は株元に敷きわらをし、泥のはね返りで葉が汚れるのを防ぎます。



敷きわらをすることで、泥のはね返りを防ぐ。

水やり
乾燥が続く夏季は、朝か夕方十分に水やりを行います。

第7図 追肥

施肥後、軽くクワで土寄せする。



土寄せの際、マルチのすそはがしておく。1㎡当たり化成肥料30gを、畝の側方に施す。

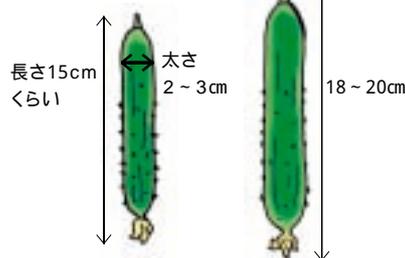
追肥・土寄せ
植え付け後は肥切れしないよう、月に2回、化成肥料を施します(第7図)。

第8図 収穫

図を目安に収穫適期を判定する。

<1~3果>

<それ以降>



5 収穫
最初の2~3個の果実は、株を疲れさせないため、長さ2~3cmを目安に若どりします。それ以後は、18~20cmくらいになったらほとんど収穫します。うっかり見逃すとヘチマみたいに大きくなってしまふので、注意が必要です。キュウリは漢字で「胡瓜」ないし「黄瓜」と書きますが、特に「黄瓜」は、完熟すると黄色に着色する性質をよく表しています。



藤田 智 (ふじた さとし)

プロフィール
秋田県生まれ。恵泉学園大学園芸文化研究所助教授。専門は野菜園芸学、植物育種学、農業教育学。「NHK趣味の園芸」講師、雑誌「やさしい畑」連載のほか、ラジオなどでも野菜作りの魅力を伝えている。主な著書に「別冊NHK趣味の園芸・わが家の片隅でおいしい野菜を作る」(NHK出版)など多数。

上記の農薬は、通販では取り扱いがありませんのでご了承ください。